

祖父が入門後押 (下)

8番相撲を見に上京 ていた。

番付に「富樫」の名前で

りファンだった。そして孫 決めた。初日は敗れたがそ 館に出掛けることを急きょ を見るため東京・蔵前国技 時8日制だった最後の相撲 る」と翌30年の初場所、当 津風部屋に出稽古に赴いて 年秋、一門の伊勢ノ海部屋 現役時代の栄光を知ってお 戸の祖父・蔵人にしても、 時津風部屋を創設した。柏 線を引き、双葉山道場こと 葉」と呼ばれ、立浪部屋か の後6連勝と快進撃を続け は土俵がないため、連日時 ら引退後独立。古巣とは一 に入門した。 その相撲部屋 剛が昭和29(1954) 69連勝の双葉山は「大双 「孫の様子が気にな と娘(剛の母)の「相撲は やめて山形に帰ってほしい 序ノ口に初めて載ったが妻 の気持ちはくすぶっている。

> の長兄・勝だった。 たのだ。同行させたのは剛 様子を見に行こう」となっ それなら俺がいっちょう

ふれ、期待に胸が膨らんだ。 楽しみだのう」好奇心があ はり生の双葉山を見るのが ぶり。「孫は楽しみだが、や ったこともある蔵人だが、 山形を出るのは本当に久し 日露戦争に出征、海を渡

丸餅抱え夜行列車に

あり、自ら育てた果物を売 当時76歳。茅葺き職人で

りさばいたことで、それな りの蓄えもあっての上京。 た丸餅をいっぱい抱えて夜 行列車に乗り込んだ。 が作った欅の臼に杵で搗い 「部屋の皆さんへ」と自分

と一緒の部屋でのちゃんこ 器だったこともあり、力十 は驚いたが、実際入門させ あって師匠・伊勢ノ海親方 た剛少年は思った以上の大 父が上京する?」 時代柄も 「入門したての弟子の祖

まだ。体験入 舎に帰りま 父と一緒に田 っかけで「祖 識もある。ち 門中との認 す」と言われ ょっとしたき 森(弭間幸雄)を案内人と

姿。剛は素足 蔵人(勝撮影) は幕下で足袋 で。左端柏森 に下駄。右端 に雪駄で羽織

蔵前国技館前

仲良しだった時津風部屋の かねない。「土俵の鬼」と ため上京、不退転の決意で るため否応なく相撲界に入 と若乃花は家族を食べさせ 力士になっていた。 の鍛冶屋に3年勤め、金を 北葉山も中学卒業後、 った。よく一緒に稽古して 室蘭

柏森が蔵前に案内

くなど歓待した。実家では ではなく、夕食は自室に招 出身で五歳上の兄弟子・柏 同じ山形(鶴岡市上郷地区) たかもしれない。そのため の剛少年はまだ子どもだっ それらに比べたら、当時

れからも頼みます」と託し がいてくれて安心した。と して蔵前まで同行させた。 強くなりますよ」と説明に これ努めさせた。これに蔵 屋の環境にも慣れてきたし、 人は「あなたみたいな先輩 「剛くんは大丈夫です。部

よ」と短い言葉で力士生活 丈夫だ。心配しなくていい を実感した。上京中も「大 精神的にも大きくなった姿 一方で祖父は孫が一回り

> を続ける意思を示した。「こ 蔵人は胸のつかえがおりた る。と妻と娘に説明できる」 れならば、孫はやっていけ 気分になった。 ったのだ。あてにしていた

2つ誤算も安心帰郷

とを勝ともども戒めること の後は本場所中に訪れるこ 手前もある」と言われ、そ なる。それに兄弟子たちの いた8番相撲で剛は敗れ、 6勝2敗に終わってしまい 算があった。 楽しみにして 「家族から見られると硬く ただこの旅行で2つの誤

稽古場に双葉山は現れなか になった。

もう一つは時津風部屋の

しく国技館に直行していた。 千秋楽の朝は場所業務が忙 まあそれも巡り合わせだ。 となった。 孫の元気な姿にホッと一安 心して再度夜行列車で帰郷 (富樫 嘉美) ||敬称略||

毎週火曜日付に掲載

退。時津風部屋を創設し大 昭和43年、56歳で死去。 相撲協会理事長を務めた。 巻き込んだ。終戦の20年引 連勝中は国内を熱狂の渦に 全勝が8回。前人未到の69 関北葉山、豊山らを育て、 ◆双葉山 12回の優勝中



新聞社系の雑誌は相撲別冊を競い合った 双葉山が表紙のサンデー毎日別冊・昭和16年春場所展望号